

藤村全集

第六卷

筑摩書房版

藤村全集第六卷

昭和四十二年四月十日發行

著者 島崎 藤村

發行者 竹之内 靜雄

發行所

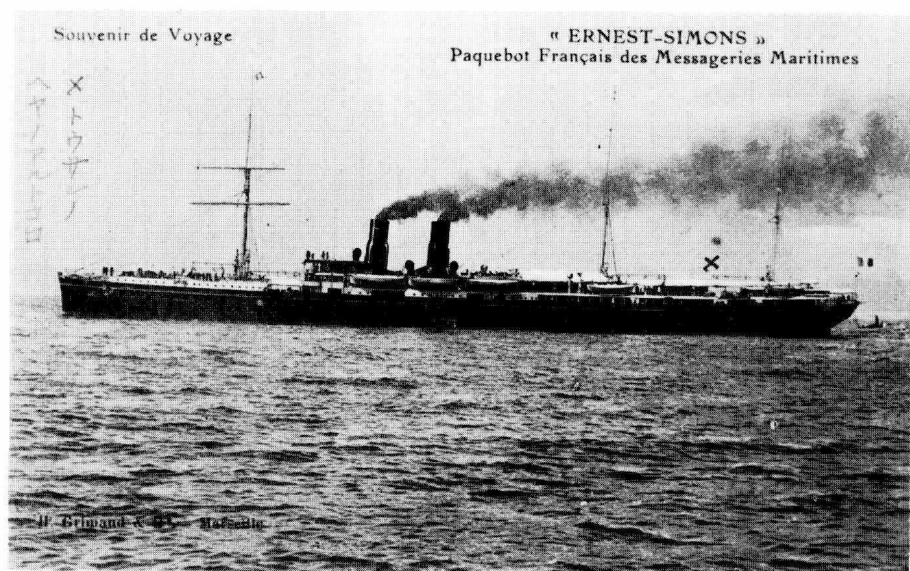
東京都千代田區神田小川町二ノ八
株式會社 筑摩書房

電話 東京四一七六五一(代表)
振替口座 東京四一二三番



新片町にて（四十一歳）

次男鷄二 六歳(左) 長男楠雄 八歳(右)



エルネスト・シモン號 子供たちに宛てた繪はがき



巴里ボオル・ロワイアルの客舍前景

第六卷 目次

新片町より

序	三	印象主義と作物	三〇
浅間の麓	五	寫生	三三
吾國民性の缺點	八	書齋と光線	三五
ルウソオの『懺悔』中に見出したる自己	九	北村透谷君	三九
放浪者	二三	青年の書	四二
老婆と孫	二六	單純なる心	四三
靜坐の努力	二七	ミレエの言葉	四三
モウパッサン	二七	『運命』の著者	四三
煩悶者	一九	新生	四四
モデル	二〇	精神の自由と肉體の自由	四四
放浪者	二二	教育の分業法	四五
『博多小女郎浪枕』を舞臺の上に見て	二三	健全、不健全	四五

一日	哭
憐むべきもの	哭
凌霄葉蘭	哭
今	哭
日記	哭
面白く思ふこと	哭
外面と内面	哭
無智の悲哀	哭
言葉	吾
自信ある人	吾
専門家	吾
涙と汗	吾
イブセンの足跡	吾
トルストイ	吾
批評	吾
チエホフ	吾
佛蘭西にある友人の消息	吾
批評	吾

額の汗	吾
養鶏者の友へ	吾
牧師の言葉	吾
愛	吾
女子と修養	吾
新聞紙の傾向	吾
歡樂の時、活動の時	吾
山國の新平民	吾
發賣禁止	吾
小村とウキッテ	吾
明治學院の學窓	吾
長谷川二葉亭氏を悼む	吾
モウパッサンの小説論	吾
聲	吾
淺草にて	吾

後の新片町より

秋の歌	二三	若き晶川の死	二六
縁 雨	二四	北村透谷の短き一生	二七
Life	二六	黒 船	二八
芭蕉の一生	二七	歴 史	二七
生 活	二八	清少納言の『枕の草紙』	二七
人	二九	観ることと書くこと	二九
齒痒きもの	二九	オスカア・ワイルドの言葉	二九
『ボヴァリイ夫人』	二〇	愛	二四
生の跳躍	二〇	藝術家	二四
愛憎の念	二三	思 想	二四
このごろ	二三	人生のハアモニイ	二四
モウパッサンとトルストイ	二三	吾儕の缺點	二四
勞働の世界	二三	大 家	二四
風俗話家	二四	靜物の世界	二四
偶像の破壊	二四	自 由	二八

外界と自己	一四
社 會	一四
文藝委員會	一四
厭世家の養生	一五
今日の教育	一五
市川團十郎の言葉	一五
河	一五
子供と大人	一五
科 學	一五
『露西亞印象記』	一五
障 子	一六
虚偽の快感	一六
柚 湯	一六
音樂を求むる心	一六
深刻	一六
時	一六
樹木の記憶	一六
昔の跡	一六

東坡の晩年	一六
甲武線	一六
藝術の保護	一六
『三人の處女』の序	一六
自由劇場の新しき試み	一七
(一) 試演前	一七
(二) 『ボルクマン』	一七
(三) 『出發前半時間』と『犬』	一八
(四) 『歡樂の鬼』『第一の曉』『河内屋 與兵衛』及び『奇蹟』	一八
(五) 『寂しき人々』	一八
(六) 『道成寺』と『タンタデイルの死』	一八
文藝の生命	一九
『遠野物語』	一九
問 答	一九
帝國大學の文科	一九
セザン	一九
フロオベルとモウパッサン	一九

人生派と藝術派	二九	若き作家の短篇	三五
ダヌンチオ	三〇	人生の精髓	三六
新作の洪水	三〇	情熱の繪畫	三六

平和の巴里

序	三二	セエヌ河畔の家々	三六
巴里の旅窓にて	三五	暖爐のほとり	三七
露西亞の舞踏劇とダヌンチオの『ピサネル』	三三	『タンタジールの死』を舞臺の上に見て	三八
祭の日	三九	音樂會の夜、其他	三九
エトランゼエ	四〇	異郷の春	四一
再び巴里の旅窓にて	四六	巴里の五月	四三

戦争と巴里

戦時に際會して	三九	ギエンヌ河の旅情	三七
リモオジュの客舎にて	三二	戦争の空氣に包まれたる巴里	三九
巴里在留の同胞	三三	オート・ギエンヌの秋	三三

拾遺

ポルドオより巴里へ……………	三六五	詩人ベギイの戦死……………	四三三
ある友に……………	三七九	河上、河田二君の歸朝を送る……………	四六六
春を待ちつゝ……………	三九五	街 上……………	四四四
篤志看護婦……………	四〇〇	人形芝居……………	四六二
小諸時代……………	四一〇	偶感（膠山絹海帖のはじめに）……………	四〇六
「旅がらす」……………	四一〇	今回の募集に就いて（『信州文壇』一週 日記“課題”）……………	四〇六
面……………	四二二	「作文帖」添削……………	四三三
『朝嵐夕雨』跋……………	四三三	新片町時代……………	四四五
消 息……………	四三三	「愛讀せる外國の小説戯曲」への回答……………	四四五
消 息……………	四四〇	綠蔭雜話……………	四四五
小諸だより……………	四四五	言文一致の二流派……………	四六七
『草わかば』の作者に（蒲原有明詩集 『草わかば』）……………	四六六	序（小島烏水著『山水無盡藏』）……………	四六九
新しき鬼（青柳有美氏が新著のはしに）……………	四七七	「女は如何なるハズミにて墮落するか」……………	四六九
序（若松賤子譯著『忘れかたみ』）……………	四八六		

への回答	四六	自然派と非自然派	四四
文學談	四三	雨聲帖寄せ書	五五
寒き口唇（予の「文學談」に就いて）	四四	序（吉野臥城著『痛快』）	五五
『村長』の言葉（『さゝにこり』序）	四六	『壁』に就て	五五
吾が生涯の冬	四七	『新年物と文士』への回答	五六
「春」と「龍土會」	四三	自然から藝術を得る（「新技巧といふこと」への回答）	五六
一葉女史に就いて	四四	一葉女史と其周圍	五七
「予の今年に於ける銷夏計畫」への回答	四五	序（山浦瑞州著『一兵卒の告白』）	五九
「會遊の避暑地」への回答	五五	「予の新しき希望」への回答	五九
序（丸山晚霞著『女性と趣味（水彩畫法）』）	五六	最近の文學界所感	五九
現時の小説に就いて	五六	正宗白鳥論（人を愛せずして、人より愛せらるゝ人）	五〇
煙管三本（机に向ふ時の感）	五七	事業と人	五〇
「小説家の好む小説」への回答	五八	「文士の生命は何故に短きか」への回答	五三
「春」執筆中の談話	五九	「和洋何れを好むか——名流の衣食住」への回答	五三
小説の題のつけ方	五〇	クロボトキンの自傳	五二
序（田中貢一著『花物語』）	五一		
明治學校校歌	五二		
種の爲め、女	五三		

北村透谷君……………	五三
文學談片……………	五五
東西の相異（「活動寫眞について」への回答）……………	五七
森鷗外論（聯想と同顧）……………	五七
「銷夏招涼の珠」への回答……………	五八
「嗜好の果物——秋の感想」への回答……………	五八
昨日午前の日記……………	五九
「文藝家と晚餐」への回答……………	五九
「早稻田派文士の長短」への回答……………	五九
自由劇場試演所感……………	五〇
何物をか吾生涯に與へし旅……………	五一
「名士と花」への回答……………	五四
五月の文藝雜誌……………	五四
都會の情調……………	五五
有樂座を見て（自由劇場第二回試演雜感）……………	五六
旅の印象……………	五六
募集小説を読む……………	五八
透谷君の故家……………	五九

文藝委員會に對する予の希望……………	五四
募集小説を読む……………	五四
河岸の家より……………	五四
募集小説を読む……………	五四
八月の募集小説……………	五四
「明治文壇天才觀」への回答……………	五四
讀募集小説……………	五四
古きを溫める心（『早稻田文學』記者との問答）……………	五四
讀募集小説……………	五一
讀募集小説……………	五一
讀募集小説……………	五一
『徹』の批評……………	五五
『新潮』の記者に……………	五五
坪内博士（坪内逍遙論）……………	五六
輝いた人と輝かない人（「明治の文壇及び劇團に於て最も偉大と認めたる人物事業作品」への回答）……………	五六

遺稿の後に（島崎正樹『松か枝』）	五二
序（有島生馬著『蝙蝠の如く』）	五三
「上場して見たき脚本三種」への回答	五四
装釘に就て（『春』と『家』及び其他）	五五
出發前の感想	五七
『櫻の實』の讀者に	五八
三月桃節句（種菓子屋・相川氏の求めに 依る廣告文）	五九
フランス時代	五七〇
巴里の藤村氏より	五七〇
『櫻の實』について	五七一
戒嚴令下の巴里より	五七一
リモオジュにて	五七三
消息	五七三
歸國當時	五七五
若き佛蘭西の二作家（小説家フキリブ と詩人ベギー）	五七五

佛蘭西の新聞紙	五七七
田山君の『時は過ぎゆく』	五八一
佛蘭西の芝居	五八二
床しい佛蘭西娘	五八五
漱石氏（漱石氏に關する感想 及び印象）への回答	五八六
稿を繼ぐ前に（『櫻の實の熟する時』）	五八六
序（高村真夫著『歐洲美術巡禮記』）	五八八
オート・ギエンヌの田舎	五八九
櫻川町で	五九一
『信濃歌選』序	五九三
有島生馬氏の印象	五九四
フランス人のディレッタンチスム （『各國國民性の文學的觀察』への回答）	五九六
解題	五九九

新片町より

序

文學を愛好して、その意味を知り且つ味ひたいと思ふと、よく言つてよこして呉れる讀者がある。さういふ人達に讀んで貰ひたいと思つて、この小冊子を編んだ。

人は年をとるに随つて、次第に本を讀まなくなる。若い時に蓄へた智識を以て満足する。多くの讀者が青年男女であるのは怪むに足らぬ。それを思ふと、讀める時によく讀んで置くのが肝要だ。經驗は無益なことまでも人に強ひたがるものである。文學を味ひ知るといふ上から言つても、もとより經驗に耳を傾ける價值はある。たゞそれを打碎くだけの若さがなくてはならぬ。

専門的の智識は、又、兎角人を束縛するものである。例へば、文學を語るにしても、内容奈何とか形式奈何とかの僅かな言葉で概括的に言ひ表はし得るものではないと思ふ。今少し考へ方を自由にしてかゝる必要がある。

吾儕は『人』としてこの世に生れて來たものである。ある専門家として生れて來たものではない。文學の道路も先づこゝから出發せねばならぬ。

『生』そのまゝに——生き、愛し、死ぬる『生』そのまゝに物を見得るといふ時は、人の一生にとつて、さう澤山はない。それだけ尊い時だ。それだけ自然な時だ。斯ういふ時が、一生に僅かしかなくても、その人は意味多き月日を送つたと言はねばならぬ。諸大家の一生に就いて見ても、ある人の晩年は一種の社會觀といふやうなものに囚はれたし、ある人は道德的になつたし、ある人は病的になつたし、ある人のごときはまた極端に宗教的になつた。しかし、すぐれた文學は『生』そのまゝに物を見得るといふ時に產れたものであることを忘れてはならぬ。是は、